岩手大学教育学部研究年報　第四十三巻第一号（一九八三・一〇）

藩校と鈴門

――本居派および他派混成の藩校について――

中村一基
（岩手大学教育学部）

序

本稿は「藩校と鈴門―本居派の藩校について―」（『岩手大学教育学部研究年報』第四十一巻第二号）につゞき、藩校が鈴門の形成と展開に果した役割について論じたものである。

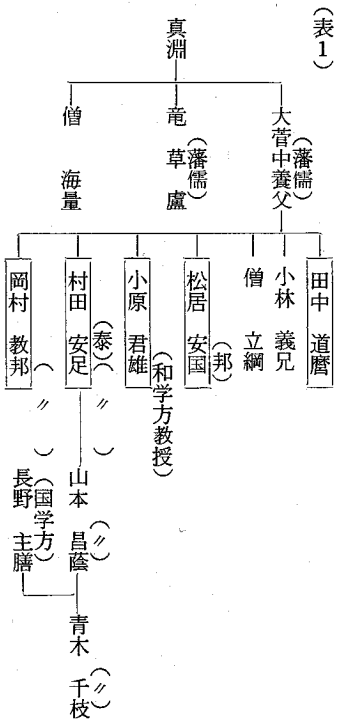
なお、本稿においても、鈴門というのを、宣長の直接の門人だけでなく、本居派国学者と考えられる者までを含めた。

断らない限り宣長に関する著述は、筑摩書房版『本居宣長全集』、書簡は、奥山宇七編『本居宣長翁書簡集』に拠る。又、門人の姓名に附された番号は、「授業門人姓名録」追加本（本居宣長記念館蔵、宣長全集第二十巻所収）にもとづいた通し番号である。

1　彦根藩稽古館

稽古館（天保元年、弘道館と改称さる）が、創立されたのは、寛政十一年（一七九九）、十二代藩主井伊直中の時であり、「古事記、六国史以下日本史や和歌を教授する」[1]〈和学方〉もこの時設置された。そして、〈和学方〉教授として抜擢されたのが、鈴門小原君雄（355）と村田安足[泰]（437）であった。

（表1）



（笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』下）

注―□で囲んだ者は、鈴門である。

右の学統表であきらかなように、小原君雄、村田安足だけでなく、岡村教邦（377）も、後に〈和学方〉教授となり、本居派国学を講じていく。又、山本昌蔭や青木千枝のように、直接的には宣長の門人ではないが、本居派国学を継承した者が〈和学方〉教授となること

によって、彦根藩国学が一貫して本居派国学であったことは、想像に難くないだろう。十四代藩主で大老となった直弼の、国学の師でもある長野主膳は、学統的にははっきりしないが、南啓治氏の「彦根藩学と国学」[2]によれば、弘化四年（一八四七）、直弼に提出した、藩政改革意見書ともいうべき『沢能根世利』には、宣長の『秘本玉くしげ』に通じる国学的見地からの改革論が展開され、主膳も本居古学に影響されていることがみてとれるという。以上のような、本居派国学の隆盛をみるためには、学統表からわかるように、真淵国学の土壌が不可欠なものとしてあった。ただ、大菅中養父・竜草廬らは、国学者であるというよりむしろ、徂徠学派の儒者（―草廬は、古注学派宇野明霞にも学んでいる）として知られていたが。ちなみに、「文学上全般に関し兼ねて講義会頭を掌る」[3]〈学問方〉初代教授となったのが、彼らの子である大菅南坡・竜玉淵であった。彦根藩学は儒学的には、徂徠学派の立場に立ったのである。さて、中養父は、正式には真淵門ではなかったが（「県居門人録」に見えず）、県門加藤枝直（千蔭の父）の明和三年から安永九年にかけての日記（東大史料編纂所蔵）、安永二年（一七七三）十月二十六日の条に、「大菅仲養父と申は先年竜彦二郎（―草廬）より状添、扇子箱持逢に来る者也。彦根の家老の家来之由」とあることから、安永二年以前から、竜草廬の紹介[4]によって枝直を始め県門の諸子との交流をもったことが推測できる。中養父の上京については、田中道麿の歌集『田中道全集』（草稿本）の明和元年（一七六四）の条に、「千之先生（―中養父）に武蔵によみてつかはしける、／東路の旅の衣も春過て夏来にけりとぬきかふらんか／武蔵野の草の枕のいふせくていをねかぬらん君をしそ思ふ」[5]とあることから、少なくともこの年までさかのぼることができよう。真淵はいまだ生存しており、直接の対面も可能であったはずであるが、さだかではない。竜草廬は、寛延三年（一七五〇）以後、藩主直定に仕え、月俸を受けてはいたが、宝暦七年（一七五七）、伏見より彦根に移り、家塾を開き、藩の子弟を教育することになったので、中養父との交流も、この年以後親密になったと考えられる。『県居門人録』に、「彦根家中龍元次郎（公美）」と書かれているのが、年次的には宝暦七年頃なので、中養父の真淵私淑もこのころからと考えてよいだろう。又、県門として知られる僧海量も、前掲の加藤枝直日記、明和三年八月朔日の条の「一、竜彦二郎より書状、彦根之僧海竜（―海量）持参。玄関にて対面。（中略）海竜、神田白壁町に居、逗留中近日又可参と申候」という記載から、中養父と同じく、竜草廬の紹介で枝直に会っていることが知られる。以上のことから、草廬の彦根に於ける影響が大きなものであったことは、想像に難くない。即ち、草廬を中心に、中養父、その門下海量といった真淵派国学者が、彦根歌壇を形成していった。そのことは、海量の家集『ひとよはな』（天明四年成）の序跋執筆者に、田中道麿（59）、小林義兄、小原君雄（355）、松井邦（206）、群田安足（437）が名を連ねていることからもわかろう。そして、序の中に「天明の六とせといふとしのなかつき本居宣長」と、宣長の序がみえることから、天明初期において、宣長と彦根とのつながりがあったことがあきらかにされている。そのことは、天明七年に草廬が刊行しようとした『漫吟集』十巻本に宣長の序があることや、天明二年の宣長宛草廬書簡に「四月廿日御状被下候。」「詞瓊綸こと書近々上木のよし、項載仕候。近日拝見可申候。」とあることなどから、よりいっそうあきらかとなろう。[6]そして、両者の仲立ちをしたのが、同書簡に「此中蓬萊子も上り、面上申候。御噂ニ及候。」とあることから、蓬萊尚賢（125）であることが推測されよう。尚賢と草廬の結びつきについては、天明元年三月十九日付尚賢宛宣長書簡に「龍草廬歌御見せ被ㇾ下、忝奉ㇾ存候。鴨川立春うす氷けさうちとけて君が代の春の聲きく鴨のかは波、右之内、春の聲と申事いかがに思召候由、愚意御尋被ㇾ下、承知仕候。云々」[7]と、尚賢が宣長に草廬の歌の批評を求めていることからもうかがえよう。また、明和末年頃の川北景楨宛谷川士清書簡には、「倭訓栞序　とく

と御覧被成可下候」とあり、士清と草盧とも親密な関係が、この時すでにあったことを示唆する。そのことは、伯家神道家臼井雅胤編纂『神祇破偽顕真問答』（写本、神宮文庫蔵）の奥書に「宝暦八年戊寅春日借諸平安某氏謄写以蔵焉　伏水竜公美／宝暦十三年癸未之秋七月洞津谷川翁借之彦根文学伏水艸盧竜氏之所蔵焉因令尚賢写之於斎宇知津宮云云」とあることからも裏づけられよう。[8] 以上のごとく、彦根藩文教に影響を与えた草盧は、安永三年（一七七四）致仕、平安に帰り詩社〈幽蘭社〉を営み、詩歌を教え、家職はその子玉淵が継いだ。大菅中養父もすでに安永七年に歿し、寛政年間、藩主直中から信頼された真淵派国学者は、海量を筆頭とすることになった。直中が藩校設立にあたって海量に諸藩の藩校を調査させたことはよくしられる。このように、真淵派国学のもとにあった、小原君雄、松井邦(206)、村田安足が、宣長と直接接したと思われるのは『来訪諸子姓名住国并聞名諸子』によれば寛政二年（一七九〇）十一月、京都でである。宣長は同年十一月十五日、松坂を発ち、十六日に入京、二十五日に出京している（日記）。新皇居御遷幸を拝観するためであった。小原君雄らがこの間に会ったという確証はないが、翌年松井邦が入門していることから、対面したと思われる。三年後の寛政五年三月十日、宣長は健亭（―春庭）・大平を伴い上京、四月十二日出京、十三日には「宿ニ近江彦根松井正平宅ニ、夜歌会」（日記）と、松井邦宅に宿泊し、夜歌会を行った。「日記」によれば、宣長の彦根滞在は一泊だけであったが、歌会には、後に鈴門となる小原君雄・村田安足・岡村教邦、鈴門にはならなかったが宣長に指導を受けた小林義兄、安足門の山本昌陰他、五名が出席したのみならず、尾張の大館高門も出席し、盛況なるものであった（『むすび捨たる枕の草葉』）。〈出張講義〉という改まったものではなかったが、この宣長出席の歌会が、彦根鈴門の形成には欠かせない歌会であったことは出席者をみればあきらかであろう。彦根藩は、真淵派国学の土壌が形成されていたことによって、藩主直中はじめ藩の上層部に鈴屋古学に対する理解をすみやかにつくった。寛政十一年（一七九九）、家老三浦内膳嫡子三浦元苗（427）、同次男三浦元蕃（428）の入門をみている。とりわけ、前者は稽古館設立当時の〈頭取〉で、館内の庶務を総裁した。[9] ただ、藩学としての国学は、当然かも知れないが儒学に対して低い位置に置かれ、同じく教授でありながら、身分・待遇は低かった。文政八年（一八二五）藩主直亮が、稽古館の職員に対して藩校改善案を提出させた中に、「一騎前世話、等術方、和学等御用掛り当時一人ニ相成り闕講勝チニ御坐候。今一人ツヽ御用掛り被仰付候様仕度事」（「稽古奉行今村長十郎、中野平馬考意」）[10] とあり、当時の〈和学方〉の凋落がうかがえる。村田安足は文政六年に歿したため、残っているのは小原君雄のみであった。ちなみに、宣長歿後、春庭・大平に通じていたのは、小原君雄・村田安足・三浦元苗であったが（「故翁門人姓名録之内大平并春庭方音信不絶分」）[11] 三浦元苗も文化三年（一八〇六）に歿している。又、春庭・大平の門人録をみるに、彦根からの入門者は、大平の方に二名いるのみである。このような状況に対して、君雄は「考意」として、「所詮国学（藩学）中ニ和漢学問並ビ被行候事ハ互ニ邪魔ニ相成可申趣モ御座候ヘバ、和学ハ勿論天文算術兵学礼節等御止メ被仰渡、儒学武芸之二道計繁栄相続可然御儀ニ奉存候。」[12] と、藩校に於ては、儒学・武芸のみ行い、国学及び諸芸は、（芸州や肥後のように）藩当局と密接に連絡をとりながら、私塾形式で教育するのがよいと提案した。だが、この意見はとりあげられなかった。その代わりとして、天保四年（一八三三）、鈴門で君雄にも従学していた岡村教邦が、同じく天保年間に、安足門の山本昌陰が、〈和学方〉教授として任命されるに至った。教邦は藩校で教えながら、私宅においても国学・和歌を教授し、その門人の多きを教えたという。[13] 嘉永三年（一八五〇）、直亮についで直弼が藩主となる。直弼は始め岡村教邦、山本昌陰に師事したが、後に長野主膳と師弟の約を結んだ。その結果主膳が同五年十月、弘道館（―稽古館を改称）〈国学方〉

教授に任じられることになり、昌蔭門で主膳門であった青木千枝が、安政元年（一八五四）、同教授に任じられたのである。ちなみに、儒者として直弼の片腕になったのが、小原君雄の男で、出でて中川氏を昌した徂徠学派中川禄郎（漁村）であった。主膳の国学者として幕末彦根に果した役割は大きかった。主膳の主催する歌会には、藩士・僧侶・神主・商人・女性など広範囲の人々が参加した。そして、そのことと関連するが、天保十二年（一八四一）以降、主膳の門に入る者も多く、「門人録」によれば、その数二七八名を数えたという。[44]

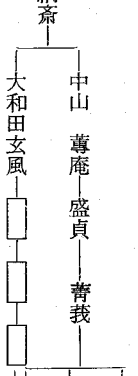
主膳の出自については、不明な点が多いが、桜井祐吉の『松阪文芸史』（七一丁オ～七二丁ウ）によれば、天保年間、彦根に出てくる以前、伊勢飯高郡宮前村に七年間住み、大平門、瀧野知雄を出した瀧野家の知遇を得、知雄の姉たきを妻としたという。主膳の著述『末分櫛』が、大平門堀内広樹の序をもち、出版は柏屋兵助によることからも、大平門との交流は推測に難くない。

2　秋田藩明徳館

藩校明徳館（創設当時明道館、文化八年明徳館と改称）の創立は、寛政元年（一七八九）、藩主佐竹義和の時である。創立とはいっても、学校建設が終了し、明道館と命名され、祭酒以下の学識が任命されたのは寛政五年であった。[45] 藩学の学風は、闇斎学派の中山菁莪が初代祭酒になったりはしたが、菁莪に次いで祭酒となった金岳陽、野上陳令らが、山本北山門下というように、村瀬栲亭・山本北山に発する折衷学派の学統がその指導的中心をなした。[46] 藩校に〈和学局〉が設けられたのは、文政八年（一八二五）、その初代教授に任じられたのが、本居派国学者、大友吉言（直枝）、鳥屋長秋である。大友直枝は、春庭の門人録では、文化二年入門の平田篤胤の一人後に「出羽国平鹿郡八沢木村　神職　大友直枝吉言」と載り、大平の門人録（本居文庫蔵）では、文化三年入門として載り、このように春庭・大平の両者に入門し、鳥屋長秋は文化五年、大平に入門している。このように、本居派国学が秋田に入ってきた理由として、秋田唯一の鈴門大友栄太（親久）（483）の存在があげられよう。大友栄太は直枝の叔父にあたり、やはり八沢木村神職であったが、享和元年九月十三日、宣長の歿する直前、鈴門として名を連ねた（「金銀入帳」）。栄太は宣長歿後、春庭大平の門人となり、「古事記伝しきり写居申候得共細書にて尺行不申候。」（「年紀不明、栄太書簡」大友家所蔵文書）とあるように、松坂の遊学をつづけたが、不幸にも文化元年（一八〇四）十二月二十日、松坂で客死した。甥の直枝は、栄太の遺志をつぐべく、養父である叔父の正木吉鐫をはじめ、社家一同の期待をになって文化三年二月家を発ち、松坂に赴いたのである。又、藩当局も岡見知康など、彼の遊学費について便宜を計っている。直枝の遊学は、文化三・四年は伊勢に於いて、同五・六年は京都に於いて吉田家に入門、同七年は江戸の蒲生君平、塙保己一の和学講談所や昌平黌に通学するなどつづけられたが、同八年養父正木が病床についたこともあって帰郷、終わりを告げた。帰郷した直枝は、文化九年（一八一一）十月、正木が病歿すると、十二月、秋田藩社家大頭役に就任した。同十年、直枝は家塾を開く。「大友吉言授業門人姓名録」[47]によれば、文政十年までに九十名の入門をみている。秋田藩国学の種子は、直枝によってまかれたのである。文政八年（一八二五）十月、和学取立方に任用されるや、彼は和学発会町触を出すことを要求、同九年一月「一、三日　古事記　一、十三日・廿三日源氏物語／右の通、毎月於御学館御読書間、巳の刻より大友直江講釈致候間、御家中並社家とも、勝手次第罷出可被致聴聞候。且当月廿八日、於同所和学発会有之候間、是又同刻、勝手次第可被致出席候。」という町触も出されたが、〈和学局〉の状態は、机、薬鑵ひとつ備わらず、和書も全く不備、各教官が持ちよるといったひどいものだった（「文政九年一月廿三日、直枝上申書」）。直枝は、藩当

局に対し上申書、覚を提出、〈和学局〉の改善を計るだけでなく、自らも住居を八沢木から秋田城下にうつすなど、国学教育に対する熱意には、すさまじいものがあった。ただ、彼の熱意にもかかわらず、明徳館の国学はあまりふるわなかった。その理由としては、藩学の中心が儒学に置かれていたこと、秋田における国学の歴史が浅いため、国学に対する認識も低く、藩士の需要も少なかったこと、又、藩の上層部においても岡見知康や高階靱負など一部を除いて、ほとんど国学に対する理解がなかったことなどがあげられよう。直枝は、文政十年には藩校に於ける国学教育を断念し、家塾中心の教育に力を注ぐようになった。そのことは、「門人録」文政十年の項に、四十八名にのぼる入門者をみたことから推測できよう。文政九年いっぱいで明徳館から手を引いた直枝の後に、〈和学局〉教授となったのは吉川忠行といわれる。忠行は明徳館に入学して、皇学・歌学・天文・地理を研鑽しているので、直枝の学統と考えてよいだろう。ただ、本居派国学者とは言えない面をもっていた。それは、天保十二年(一八四一)、江戸退去を命ぜられた平田篤胤が、秋田に持ってきたオランダ語の算術、戦法、砲術に関する書を悉く忠行に贈与し、彼を友人として遇したこと、忠行がそれらの書によって砲術について会得するところがあり、篤胤歿後、安政三年(一八五六)「惟神館」という武学講習所を設立した際、篤胤の教えに従って館内に天照大神を奉祀し西洋砲術を研究したことなどからかんがみて、篤胤の影響大とみなければなるまい。篤胤は天保十四年に歿するので、秋田での生活はわずか三年間でしかなかったが、講釈、会読を行なうことによって、退去後、秋田の入門者四十七名をみた。藩の上層部で平田学に共感するものを含めれば、実数的にはもっと多かったろう。平田古道学は、こうして秋田藩に注ぎこまれたのである。文久三年(一八六三)、篤胤の生家大和田家が篤胤を記念して「雷風義塾」を創立、講師となったのが吉川忠行とその子忠安、篤胤の知友小野崎通亮は、明徳館〈和学局〉教授であったので、当然藩の国学は平田派にしめられることになった。秋田藩が奥羽列藩の中で勤皇の旗幟を鮮明にした背後に、「惟神館」「雷風義塾」を中心とする平田古道学があった。このように、秋田藩の国学は、本居派から平田派へ推移したのだが、両者ののり超えられるべき土壌として、秋田に於ける闇斎学は忘れられない。

(表2)



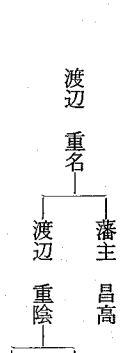
中山菁莪は前述したように、藩校初代祭酒に任じられたほどの学者で、尊王思想家であった。そして右の学統表に明らかなごとく、直枝、篤胤の漢学の師でもあった。落合直養も菁莪門の俊才であったが、享和三年(一八〇三)大平の門人となるなど(『藤垣内門人姓名録』本居文庫蔵)国学に強い関心を示した。ちなみに、直養は、秋田に於ける最も早い大平門であった。

3　中津藩進脩館

藩校進脩館は、寛政二年(一七九〇)、藩主奥平昌高の時、創立される。創立に尽力したのは、仁斎学派の藩儒、倉成竜渚、野本雪巌(竜渚門)等であった。彼らは創立とともに教授となり、藩校の教育にあたった。中津の教学大いに振興の気運に向かった。[103] そして、創立時国学教授に任ぜられたのが、豊前で唯一人の鈴門、天明七年入門の中津古表八幡社司、渡辺重名(114)であった(渡辺重兄「重名年譜」[104])。ただ「同年譜」寛政二年の条には「門弟日に多く」とあり、藩校で講釈をしたかの感を与えるが、講釈をしたのは「文化十一年五月二十日。一ヶ月三度学館に罷出で国書講釈仕候様命ぜらる」(渡辺重兄「重名経歴」[105])とあるように、文化十一年(一八一四)から と考えた方がよいだろう。そのことは「藩主奥平侍従名八昌高嶌津栄翁ノ二男ナリ

贄ヲ執テ学ヲ受ク俸若干ヲ給ス。藩士翕然此レが門ニ入ル。進脩ノ館（藩校ノ名）ニ国典ヲ講ス」（渡辺重春「渡辺重名翁伝」）という記載から、藩主昌高が重名に入門して以後、藩校で教えたと読みとれることからである。昌高が重名に入門したのは「文化二年丑十二月四日、不意に城内に被召、被尋神道三十七ケ条盡即答す。仝十二日神道御入門」「文化三年春正月より古学の和歌御入門、二月御所望に依りて御名を豊海とつけ奉りし他」（「重名経歴」）とあるように、文化二、三年であった。

（表3）



藩主の入門ということもあって、重名の館内に於ける地位は儒学の倉成竜渚に匹敵するほどであったが、天保元年（一八三〇）七十二歳で歿した。その子重蔭は、文化八年（一八一一）十九歳の時家を継ぎ、従五位下、越後介に任ぜられた。はじめ、殆んど家を顧みなかったので家道は衰頽したが、のち「翁家政ノ衰ヘタルヲ慨嘆し拮据勉励終ニ能ク振興ス」とあるように家学（本居派古学）を奉じ、家道を振興した。ただ、重蔭の「拮据勉励」が重名歿後のことであったことは、彼が進脩館の国学教授になっていないことから、推測できよう。重蔭の子重春と重石丸は、共に平田篤胤歿後の門人となり（―「門人姓名録」）によれば、前者は明治元年十二月十九日入門、後者は慶応三年三月入門）ここに、平田古道学が中津藩にも根づくことになったのである。重春は、重兄によれば、「明治二年九月、中津藩知事（―九代藩主昌邁）より皇学師範方を命ぜられ、同四年十二月、皇学教授を命ぜら」（「重名経歴」）れた。そのことによって、「学生翕然として集り、藩中敬神尊王の気、旺んに興」（同上）ったが、すでに時代は明治に入り、四年には廃藩置県が断行され、藩校進脩館も閉校されねばならなかった。このように重名によって根づいた本居派国学は、重名の孫、重春によって、平田派国学をもって完結したのである。最後に、重名の鈴屋入門に至る経過をみておく。重名は、安永五年（一七七六）上京、師はあきらかではないが、漢学を学んだ。「柴野彦助（栗山）頼弥太郎（春水）ト交リ善シ」（「渡辺重名翁伝」）とあることから、闇斎学派の柴野栗山、頼春水との親交がうかがえる。ただ、「年譜」では、「一年許にして帰国す。」とあり、その理由として「翁伝」では「一日慨然として思ヘラリ、吾ハ神州ノ人ナリ、何ソ神州ノ道ヲ措テ、漢籍ヲ学ハムヤト」という逸話を伝える。天明二年（一七八二）五月、重名は、宇治山田の荒木田久老の許に至り入門した。いわば国学者渡辺重名の生涯がここに始まる。重名が、県門荒木田久老に入門した理由はさだかではないが、中津藩主昌鹿と侍医宮沢通魏が真淵門であることと、関連があるのではないか。重名の久老の門に居ること、三年に及んだ。その間『万葉集』を中心に学ぶ。重名と宣長との関係は『来訪諸子姓名住国并聞名諸子』の天明二年十二月の条に、「豊前国中津城下八幡社司渡辺造酒（ミキ）藤原重慎」と見え、その頃から相識であったことが知られる。重名は同四年四月、一旦帰国したが、十月に再び上京し、高倉家に衣紋入門、日野家へ歌道入門（――翌年十月、日野資枝より二條家の歌道秘伝を授けられ、翌々年五月には、重名という名まで賜っている）している。宣長は「於京都故実衣紋等の学も、一通り被成候義、至極可宜奉存候。右等の学も皇朝学の一端に御座候へば、何れも助けに相成申候事に御座候。」（「天明四年十二月十四日付重名宛書簡」）と、書き贈り、勉学を励まし、久老は、学資を給するなど、重名に対する期待が大きいことを裏付ける。同五年には、藤井貞幹の『衝口発』に対する駁論を宣長と久老に乞う。宣長がそれに応えて『鉗狂人』を著したことは、「豊国人藤原重名、京にものまなびしてありけるに、或人その書（『衝口発』）を見せければいたくうれたみて、かかるふみをなむ見得はゝべる、いかでこのたはわ

ざとくうちきため給へかしと、鈴屋翁がりいひおこせたるに、うべなひていととく物せられたる此書になむ」（度会正兌「利本鉗狂人序」文政二年三月成）にあきらかである。このように、宣長との交流も深いものがあった。ただ、久老門であった重名が、なぜ宣長に入門したのかはさだかではない。「渡辺重名翁伝」では「久老世事ヲ厭フノ意有テ、門ヲ鎖シ、子弟ノ来ルヲ謝ス、故ヲ以テ、辞シ去ル」とあり、重名の方から久老のもとを去ったのではないことが、あきらかにされている。それ故、宣長は、天明八年十月二十四日付の久老宛書簡で「九州辺も皇朝学信仰之人多出来候由に御座候。豊前中津渡辺生も、帰国後殊之外発向之由に御座候。先何方も古学開け、大慶の事に御座候。」と、重名の古学鼓吹を称揚することができたのであった。

4　薩摩藩造士館

造士館の創立は、安永二年（一七七三）二十五代藩主島津重豪の時で、藩校としては早い時期に入る。儒学に於いては、薩南朱子学派の隆盛をみたが、その陰で国学は、全くといってよいほどかえりみられることはなかった。国学に目を向けたのは、嘉永四年（一八五一）二十八代藩主となった島津斉彬であった。斉彬は江夏十郎を通じ、関勇助・八田知紀（桂園派国学）・後醍院真柱（平田派国学）に国学館設立計画を内命し、朱子学のみを講習していた造士館の学風に、国学を導入しようとした。しかし、この計画は実現されなかった。ただ、斉彬の意図は、真柱の造士館訓導（―後に助教）という形で果されることになった。[19] このように斉彬の時代、薩摩には国学的には桂園派・平田派が目立っていたが、両派が入ってくる以前は、本居派国学が根づこうとしていた。宣長の門人録、又、大平・春庭の門人録にも、薩摩の門人は見出せないが、宣長に私淑した二人の国学者がいた。白尾国柱と、真柱の父大河平隆棟の二人である。国柱は「本居伊勢人。姓平。名宣長。壬戌之秋。吾（―国柱）将ニ西帰一。過ニ伊勢一訪レ之。」（白尾国芳「家譜」）[20] とあるので「壬戌之秋」即ち享和二年の秋、松坂を訪れたことが知られる。宣長は、前年に歿しているので、国柱は宣長と対面することかなわなかったこととなる。八田知紀が「白尾氏は本居翁同時の人にて、一度は相見もせられしとか聞及べり。」（『天降真蹟考』凡例）[21] と述べているが、少なくとも宣長側の著述では、その事実は見出せない。国柱はその著『成形図説』（文化二年後、成るか）に於いて「師云々」として宣長の説を引用したが、それはやはり私淑の気持のあらわれであろう。本居派国学の藩校との関係は大河平隆棟に始まる。隆棟は生粋の造士館育ちの学者であった。学生から漸次句読師・頭取・都講と進み、諸生を教導した。彼は、朱子学全盛の中でよく国学を唱導したが、不運にも文化五年（一八〇八）朋党疑獄（―近思録崩れ事件）に連座し、翌六年配流されんとして歿した。だが、隆棟の遺志はたえず、真柱にひきつがれ、幕末の薩摩藩国学を形成するのだった。

5　吉田藩時習館

三河の国学は、隣接した遠江の内山真竜・栗田土満等（遠江の県門）の影響を受けて形成されていった。天明四年（一七八四）三河鈴門で最も早く入門した吉田熊野社司鈴木梁満（90）が県門であるのも（―「県居門人録　補遺」[22] によれば明和五年冬、入門）、梁満が浜松諏訪社社司で荷田春満門の杉浦国頭の嗣子国満に入門、問学している間、同じく春満門斎藤信幸と知り合い、信幸の紹介で県居に入門したからである。そのことは「いにしふゆ菅原（―斎藤）信幸の伝へによりて、御ふみ賜ひ名ところのこのわた一をけ賜せるいと悦び侍り。又こたびうけひふみおこせ給ふしるしとて、御示御こがねももむらおくりたぶぞ万代といはひをさめ侍りぬ」（「明和六年正月

二十八日付梁満宛真淵書簡」）によって明らかである。真淵は明和六年十一月歿するので、梁満は最晩年の門人となった。真竜、土満等との交流も、同門として親密さをましたことは、想像に難くない。そして、梁満の鈴屋入門に、彼らの影響があったことも否定できないだろう（―土満は、翌五年鈴屋に入門する）。県門内部で「才気ある人」（明和五年十一月八日付信幸宛真淵書簡）とみられた梁満であったので、宣長も「扨御入門被ㇾ成候而已にては、御稗益も御座候有間敷候へば、此上何事に而も御不審之条々、御問目御認越可ㇾ被ㇾ成候、且又愚老説とても、いかがに思召候義は、少しも無ニ御遠慮一、幾度も御議論承度候。」（「天明五年二月二十七日付梁満宛宣長書簡」）と、古学精進を期待した。ところが、ここに事件が起った。鈴門史上まれともいえる破門が、「古学御執心に似合不ㇾ申、俗情鄙劣之御振舞、殊に神慮之程難計」（「同六年閏十月十四日付梁満宛宣長書簡」）という理由で、梁満に対して行われたのである。「俗情鄙劣之御振舞」とは、梁満が京都吉田家の下知を受けて、吉田領内の神主から金銭を取り立てたことをさす。梁満は社の木まで伐り払わせて、その金を取り上げたという。梁満がそのような行為をしたのが、「家職としての社家の維持という生活上の要請の圧迫」[60]によるのか、「地方巡閲などに来る吉田家の公用人などには随分如何はしいものがあった。浜松に出張して来て神職たちを集めて、金銭を徴収したものがあったが、梁満も触頭をしてゐる関係上、斯かる徒輩に対する義理立て」[61]によるのか、定かではない。ただ、この事件による梁満の破門以後も三河からの入門者はあった。（その中には、梁満の子、重野（179）もいる）。鈴木真重（286）のように真竜と親交がある者、井本彦馬（416）のように石塚竜麿（178）と親交がある者など、遠江国学者の影響下に入門がなされていったのである。宣長歿後、井本彦馬のように春庭に入門した（「春庭門人録」享和元年の条）者を含め、春庭・大平に音信があったのは、鈴木重野、鈴木真重、宝形院観蓮（452）であるが（「故翁門人姓名録之内大平幷春庭方音信不絶分」）、吉田藩に本居派国学が隆盛するためには、中山美石（うまし）の登場を待たねばならなかった。文化二年（一八〇五）八月、大平は、三河・遠江鈴門の要請で吉田を訪れ、講釈を行う。その時出席した者に、鈴木陸奥・井本彦馬・竹村尚規（468）・高林方朗（150）・夏目甕麿（418）・高須元尚（469）等、鈴門以外では、中山美石・大林外記・実相院古道・田中伝九郎・戸村直七らがいた[62]。彼らは、その時大平に入門（「藤垣内門人姓名録」本居文庫蔵）、以後、吉田藩の代表的門人となっていく。「門人録」によれば、八月および閏八月に入門した三河の門人は、十三名を教える。吉田に於いては、美石と古道の二名だけであったが、文化年間、吉田の大平門はふえていった。その中でも特記すべきは、文化十三年（一八一六）二月、吉田城主松平駿河守信順の入門であろう。信頼の大平入門に呼応するように、文化十四年五月、美石は新居関所の下役から、「△其方事、吉田勝手被仰付、（中略）時習館江罷出、書講釈可相勤候。／△其方事、時習館ニ而西岡式之助跡屋敷被下之。／口其方事、国学唯今迄之通可心掛候。」（中山美石「公事記」）[63]と時習館教授に抜擢される。美石の国学者としての実力が認められたからであろう（文化九年、信順の内命を受けた『後撰集』の注釈、『後撰集新抄』を刊行。大平が序文を寄せている）。ただ、美石の「時習館にいてゝ漢籍の講釈つかうまつれ（中略）又これかうへに大御国の学ひの方もありこしまゝにて心にかけて学ひてよ」（『藤垣内消息』）[64]という書簡の文面にもあきらかなように、彼はあくまで儒者西岡善助の後継者として抜擢されたのだった。「全ク以て儒者の跡継にてはなく国学者か儒業をかねたりといふに近く相聞」（同上）えたとしても、事実は中山美石『公事記』に「此約覧ハ故善助近頃撰述ニて、此節製本成し故、開巻開講いたし候也」[65]とあるように、漢籍『大学解約覧』を講釈している。また、同記には、時習館出仕早々「若殿様（―信順）御詠草被遣候間毎々通取斗、且、本居之詠三五首も被遊御覧度旨、尤此段弥助（美石）より宜申遣候被仰出候」[66]とあり、美石は時

習館で儒学を講ずる（―美石は折衷学派太田錦城門）一方、藩主信順に国学を講じたことがわかる。このように美石は藩主の信頼もあり、又、師の大平にも信頼が厚かったが（―美石は天保二年三月名古屋の書肆万巻屋の息子浜田孝国を大平の養子に斡旋している。後の本居内遠である。）、藩校内部に於いては、儒者太田晴軒（―錦城の子）などから、目の敵にされた様子があり、天保二年十二月、大坂在番の命が下ったのを契機に、教授職を去った。美石は天保三年から二年間は大坂に、同五年から三年間は京都に滞在（―信順が京都所司代に任命されたことによる）、その間、信順の側で国学を講じ、又、賀茂季鷹、城戸千楯など京坂の国学者達と交流を深めている。同八年帰郷、美石は隠居をしながらも所々で国学を講じ、天保十四年（一八四三）六十九歳で歿した。美石歿後、慶応三年（一八六七）の教授陣容の世話方に「国学歌学有識之方心得兼時習館学問掛素読教方時習館手習世話／三拾五俵中山弥助故弥助孫四十二」[69]とあるように、藩校の国学を孫の繁樹が受継ぐが、美石と同様時習館では漢学、個人的には国学者として、又一方で、大砲の技術修得につとめたこと、教授にはならなかったことなどもあって、藩校内に本居派国学を普及させるに至らなかった。そうして三河吉田の国学は、文政八年に大平に入門、同十年に平田篤胤に入門した羽田八幡宮の神官、羽田野敬雄によってになわれていった。敬雄の平田神道学普及の努力によって、篤胤に「三河吉田門人衆」といわれるほどの隆盛をみることになった。主に村落指導者層に平田学は受容され、鈴胤に入門する者も少なくなかった。[68]又、敬雄は「羽田八幡宮文庫」を設立し、蔵書一万巻の蒐集事業を行った。天保九年一月隠居した中山美石が吉田城内天王社禰宜鈴木岩見方で国学を開講したのを取持ったり、安政二年二月、野々口隆正が来藩して講筵を張ったとき、場所を提供したのが敬雄であった。このように、敬雄は藩士ではないが、国学者としては三河を代表する存在であり、その実力と影響力は中山美石以上のものがあり、藩校の内外を結ぶ存在として重要な人物であった。

6　藩主と鈴門

鈴門の形成にとって、藩主が果した役割は大きい。藩主が国学に関心を持ち、藩内の国学者を自らの侍講としたり、藩校の教授に抜擢することによって、国学が藩内の関心をひく結果を生み出すからである。ただ、藩主が国学に関心を持ったからといって、一概にそう言えない状態もあった。即ち、藩校教授に抜擢されながらも漢学を教えねばならなかったり、藩主との結びつきが強いほど私的な師弟の関係で終ったりするからである。前者の藩主としては、紀州藩藩主徳川治宝、高松藩藩主松平頼恕（ひろ）、浜田藩藩主松平康定、彦根藩藩主井伊直中・同藩主直弼、中津藩藩主奥平昌高、後者の例としては、薩摩藩藩主島津斉彬（あきら）、吉田藩藩主松平信順があろう。又、福井久蔵氏が言うように「熊本侯は高本紫溟の説を容れて長瀬真幸をしてその教を受けしめ、（中略）。尾州侯は横井千秋以下の人々、土佐侯は宮地春樹を、筑前侯は青柳種信を、鳥取侯は衣川長秋を」[69]鈴屋に遊学させたとなると、有力鈴門のいるほとんどの藩の藩主（―比較的親藩・譜代が多い）が彼らを後見したことになろう。さて、藩主と鈴門との関係で、後者の際だった例を最後にみておこう。その例とは、天保の改革の実行者、水野忠邦と村田春門（85）との関係である。春門は伊勢白子の出身で、伊勢鈴門村田橋彦の甥であるが、主に、江戸、大坂に住んで国学者としての活動をしたので、それらの地域との関連が深い。忠邦と知り合ったのも大坂であった。忠邦は寛政六年（一七九四）、唐津藩十代藩主水野忠光の子として生れ、文化九年家督を継ぎ、文化十四年（一八一七）、遠州浜松六万石に転封を命ぜらる。忠邦と、浜松との結びつきはこの時始まった。高林方朗（150）が、文政十年、京都所司代となった忠邦に喚ばれたのは、右のような事情による。忠邦と春門との関係は、前述したように、文政八年五月、忠邦が大坂城代に昇進し、来坂したところから

始まる。春門の「田鶴舎日次記」の文政八年五月晦日の条に「京都所司代へ松平周防守（―康任）／大坂御城代へ水野左近将監（―忠邦）／右は御役替の由風聞。」（渡辺刀水『村田春門日鈔』十五）と、そのことを記す。因みに松平康任は、春門の門人である。「同日記」の文政九年八月六日の条に「一、御城代水野左近将監家来小田切要助文学也入来、右主人国風被ㇾ致度に付、是迄周防守様御学び方、又取扱如何哉と問合に付、委細申談遣ス、近日又々被ㇾ参候筈也。」（同上、二十三）とあり、又、同十四の条に「一、小田切要介入来、疑問三四ケ条、返答申遣、殿の命也、愈々御歌はじまるべき（旨）申置帰。」とあるように、この頃から忠邦の問学が始まる。そして同二十二日「一、水野左近将監殿より、為ニ御使一小田切要介、白銀一枚御入門として被ニ相贈一候よし也」（同上）とあるように、忠邦は春門に入門する。忠邦が春門に入門する直接的契機は、春門が大坂城代の先任、松平康任の歌道指南役であったことによるが、当然、春門の京坂での国学者としての名声にその背景があろう。というのは、文政九年には、春門は京都の〈鐸屋〉の経営まで任せられているほどだからである。京坂の本居派国学を、一手にまとめた観がある同年、十一月、忠邦は京都所司代を拝命、翌年二月、京都に着任。忠邦の和歌・国学の研鑽は、この時から本格化していった。春門は所司代屋敷に出向き『伊勢』『源氏』の講義を行い、又、歌会を指導した。『源氏』の講義に至っては、天保五年（一八三四）まで実に八年の長きに渡って続けられることになった。文政十年閏六月には、前述したように高林方朗が上洛を命ぜられて歌会に出席、歌の師範、判者として遇せられる。方朗は、詠歌添削とともに、『古今集』の講義を十数回行い、忠邦らが引きとめるのを強いて請い、十二月帰郷していった。文政十二年十月、忠邦は西丸老中の発令を受けて帰府、春門は翌年、子の春野とともに江戸に赴く。あくまで忠邦の指導を続けんとの意思をもって、〈鐸屋〉を城戸千楯に返しての旅立ちであった。忠邦は、次第に政治の中枢へと近づいていた。『源氏』の講義が終了した年、天保五年の三月、忠邦は本丸老中に転じた。その五年後、彼は老中首座となり、世にいう〈天保の改革〉を断行していくのだが、幸か不幸か春門は、天保七年、それを見ないで歿した。享年七十二歳であった。[40] 忠邦は幕政の責任者であり、もし春門が、国学が持っている政治的要素を主張したならば、〈安政の大獄〉の断行者、大老井伊直弼と長野主膳の関係を先取りしただろう。しかし、春門の本居古学の実践は、いわば和歌・物語という〝文芸〟領域に限定されていた。それが結果的には、春門にとって幸せだったと言えよう。

本稿をまとめるにあたって、近世藩校についての基本的認識を、笠井助治氏の『近世藩校に於ける学統派の研究』上・下に学んだ。また、彦根藩・秋田藩・吉田藩の国学については、南啓治氏の「彦根藩学と国学」「秋田藩校明徳館と国学」「近世藩校における国学派―三河吉田藩を中心として」といった藩校と国学に関する一連の研究に教えられるところが大きかった。記して、その学恩を謝したい。

注

(1) 『彦根市史』五六八頁。
(2) 『帝京大学文学部紀要教育学・哲学・歴史』第三号、七四頁。
(3) 『彦根市史』五六八頁。
(4) 井上豊『賀茂真淵の業績と門流』三〇九頁。
(5) 岩田隆「田中道麿年譜稿」（『名古屋工業大学学報』第二十九巻）
(6) 簗瀬一雄「宣長及びその週辺の資料」（『国文学研究』第七十集）
(7) 『本居宣長翁書簡集』五九頁。
(8) 北岡四良『近世国学者の研究』二二九頁。
(9) 『旧彦根藩学制志』（滋賀県立図書館蔵）巻四。
(10) 同、巻六。
(11) 東大本居文庫蔵。

(12)『旧彦根藩学制志』巻六。
(13)南啓治「前掲稿」七一頁～七二頁。
(14)『彦根市史』五九五頁。
(15)『秋田県史』巻三、一三頁。
(16)笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』上、一二五頁～一二六頁。
(17)『秋田県史資料』近世編下、九九一頁～九九六頁。
(18)笠井助治『前掲書』下、一七七五頁。
(19)『国学者伝記集成』第二巻、九三七頁。
(20)同上、九四二頁。
(21)渡辺家系写、津市渡辺家蔵。
(22)同上
(23)『新修平田篤胤全集』別巻
(24)佐々木信綱『増訂賀茂真淵と本居宣長』八五頁。
(25)『本居宣長稿本全集』第二輯、一五四頁。
(26)笠井助治『前掲書』下、一九二〇頁。
(27)『国学者伝記集成』第一巻八〇三頁。
(28)同上、八〇頁。
(29)小山正『賀茂真淵伝』八三一頁。
(30)芳賀登『幕末国学の研究』三六九頁。
(31)小山正『前掲書』四五四頁。
(32)那賀山乙巳文氏編『吉田和学関係年表―参遠文化交流史資料―』
(33)『豊橋市史料編』第五巻十四頁。
(34)『日本芸林叢書』第九巻二五頁。
(35)『豊橋市史史料編』第五巻二一頁。
(36)同上、一七頁。
(37)近藤恒次『明治初期に於ける豊橋地方の初等教育』四頁～五頁。
(38)『愛知県教育史』第一巻、五九九頁～六〇〇頁。
(39)『諸大名の学術と文芸の研究』上、一一八頁。
(40)北島正元『水野忠邦』(人物叢書、吉川弘文館)五〇九頁～五一三頁。

(一九七三年六月六日受理)